第22回　中堂寺西寺町界隈

■ 中堂寺西寺町の寺々

今回は、第20回で訪ねた地域の、大宮通より西側をめぐることにしましょう。この地域は、第17回後半で紹介した地域の北側でもあります。

出発点は、第17回後半の最北端、五条通から櫛笥通を北上します。櫛笥町と万寿寺通の十字路の東南角に、「中堂寺櫛笥町　櫛笥通萬壽寺下ル」①の町名看板を見つけました。この看板は、町名が先に大書してあり、通りの名前がうしろに書いてあります。

さらに北上して、櫛笥町と万寿寺通の十字路の東北角に、町名看板「中堂寺西寺町　萬壽寺櫛笥通東入」②。同じ十字路の西北角の電柱に、今度は「中堂寺櫛笥町　櫛笥通萬壽寺東入」③の町名看板が貼ってあります。この看板は、位置がおかしい。推測ですが、もともとは、①と直角の位置に貼ってあったのを、空調を設置するときに取り外して、捨てるのがはばかられたので、電柱に貼り付けたのでしょう。これら二枚の看板も、町名が先に大書してあり、通りの名前がうしろに書いてあります。

万寿寺通を少し東へ進んだ北側の町家にも、町名看板「中堂寺西寺町　萬壽寺櫛笥通東入」④。最初の調査のときには、二階部分にあったのですが、二〇一〇年に再調査をおこなったところ、

中堂寺櫛笥町　櫛笥通　萬壽寺下ル①

町名看板の所在（中堂寺西寺町界隈）

中堂寺西寺町　萬壽寺　櫛笥通　東入②

中堂寺櫛笥町　萬壽寺　櫛笥通　東入③

隣の勝光寺門前に移設されていました。もとの町家は立て替えられて、勝光寺が経営するたちばな保育園の保育室になっていました。長い間貼ってあったために、町名看板を取り外しても、捨てるのがはばかられるという感情があるのでしょう。なにはともあれ、このような形で、町名看板をぜひとも残してほしいという希望をこめて、新旧の位置の町名看板④の写真を載せましょう。

「中堂寺西寺町」の町名のとおり、この一角にはたくさんのお寺があります。『京町鑑』（宝暦一二年〔一七六二〕）では、松原通の横町を列挙した末尾に、次のような説明があります（句読点、

中堂寺西寺町　萬壽寺　櫛笥通　東入④（旧位置）

中堂寺西寺町　萬壽寺　櫛笥通　東入④（新位置）

新位置の④とたちばな保育園の門標

割書、現代仮名づかいによる振りがなは筆者）。

大宮西入町は、大宮上ル下ル堅町へ付也。此町北側、正法院、西隣法宣寺、いづれも浄土宗。南側、大宮少し西下ル堅町筋有。是、一貫町通也。此一貫町の西は中堂寺西寺町とて一筋有。南へ行は七條へ出る也。右中堂寺町両側皆寺なり。西照寺、善徳寺、末慶寺、専求寺、勝光寺、いづれも浄土宗也。福壽院、眞言宗。中堂寺、長圓寺洛陽三十三所の内観音有、浄土宗也。艮立院、眞言宗也。

『京町鑑』、宝暦一二年〔一七六二〕

『新修京都叢書第十巻 山城名跡巡行志・京町鑑』光彩社、一九六八

「此一貫町の西は中堂寺西寺町とて一筋有」とありますから、『京町鑑』は、中堂寺西寺町通を櫛笥通のかわりに使っています。櫛笥通に並ぶ寺々は、ほぼ現在もそのとおりです。

中堂寺西寺町の一角にこのように寺が集まったのはいつ頃なのでしょうか。豊臣秀吉の京都改造（天正の地割、天正十八年〔一五九〇〕頃）のときというのがごく自然な発想ですが、実際はそうではないらしい。

京都大学付属図書館蔵の洛中絵図（中井家絵図・書類七四、http://hdl.handle.net/2433/77614）では、この地域には、松原通、長円寺（慶長一三年〔一六〇八〕創建）、その門前が描かれているだけです。残念ながら、この絵図の年代は明確ではありませんが、中井家は、江戸幕府の京都大工頭であった家柄ですから、江戸時代初期の絵図とみてよいでしょう（『京都市の地名』によれば、「寛永後万治前」〔一六二四～一六五八の間、一六四二頃〕とされています）。この図には、島原西新屋敷の部分が「傾城町」として載っていますが、道筋がどう考えても不自然です。六条三筋町から島原西新屋敷への移転（寛永一八年〔一六四一〕）が、図の完成前後にあったために、急遽挿入したと考えられます。その証拠に、図の六条三筋町の部分には、正式名称である「柳町」の付いた「柳町上町」「柳町中町」「柳町下町」の記載があります（第6回参照）。また、西洞院川東岸の五条橋通（現在の五条通）と六条通の間に「太夫町」の記載が二箇所あります。これらは島原西新屋敷に組み入れられた「太夫町」（一名、西洞院）にちがいない。特徴的なのは、秀吉の京都改造の際に集められた、京都東側の寺町通にある寺々の名称が、多数書き込まれていることです。このことから、長円寺の周囲の寺々（もしもあったとして）が省略されていることは考えにくい。

さらに調査すると、日文研の地図データベースの中に、もう一枚、洛中絵図がみつかりました（国際日本文化研究センター、http://hois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_1104.html）。拡大して調べると、この洛中絵図には、すでに中堂寺西寺町が形成されていて、『京町鑑』（一七六二）に記載されている寺々の名称（当てられている漢字は異なっているところがあります。たとえば、勝光寺が正光寺と表記されています）が書き込まれています。もちろん、秀吉の京都改造の際に集められた、寺町通の寺々の名称も、書き込まれています。この洛中絵図の年代もよくわかりませんが、備考に、「内容年代は元禄六年〔一六九三〕では？」と記されています。さらに探すと、洛中絵図の裏に、人口の町別の累

計が記され、「延宝八庚申年、宗旨改之時、積レ之ヲ」という記載があります。延宝八年は一六八〇年です。また、末尾に「右當酉ノ年改ム。年々不同有之の由」とありますが、酉ノ年は、延宝八庚申年の翌年と推定されますので、絵図の年代を延宝九年〔天和元年、一六八一〕と推定することも可能です。

上記二枚の洛中絵図には、鞍馬口（寺町今出川）のところに立本寺が記されています。立本寺は、秀吉の京都改造のとき、文禄三年〔一五七四〕に寺町今出川に移転。宝永五年〔一七〇八〕の大火で焼失して、現在地（上京区七本松通仁和寺街道上ル）に移転しています。安全に見積もるなら、一七〇八年より前の絵図であることがいえます。

以上のことを総合して、中堂寺西寺町の形成は、一六四〇年～一六八〇年（ごく安全には一六〇八年～一七〇八年）の間ということになりそうです。そういえば、公許の遊郭「六条三筋町」が現在の地（島原西新屋敷）に移ったのが寛永一八年〔一六四一〕のこと。このとき、六条三筋町のほかに、中堂寺（所在地不詳）、太夫町（西洞院）を合わせて移転したとあります（第18回参照）。上の京都大学付属図書館蔵の洛中絵図には、六条三筋町の三町と太夫町（西洞院）については旧所在地（第6回参照）に記載がありますので、「所在地不詳の中堂寺の遊所」というのも、旧所在地の記載があるはずと予想を立てて仔細に調べてみると、現在住吉神社のある箇所に「中道寺通」が記載されています。あるいは、ここが「所在地不詳の中堂寺の遊所」かもしれません。この住吉神社は、『山城名跡巡行誌』や『都名所図会』には「島原傾城町の産沙神」などと記載されていますので（本シリーズ第17回参照）、旧所在地にあった住吉神社の分社（御旅所）を島原遊郭内に造営したのはごく自然なことのように考えられます。さらには、本シリーズ第17回で紹介した「丹波口茶屋町之圖（松原通より四町下大宮通西へ入町）」（藤本箕山『色道大鏡』巻第十二）の中に、「是一貫町の末也。此道昔はなし。寛文十年庚戌〔一六七〇〕六月より此新道あきたり。」と注記があります。それまで一貫町通は松原通の法宣寺のところから万寿寺通のところまでで、鉤形に曲がって櫛笥通につながっていたのが（京都大学付属図書館蔵の洛中絵図）、一六七〇年に丹波口通まで延長されたことがわかります（日文研の洛中絵図では、すでに一貫町通が記載されています）。一貫町通が整備されたことに示されるように、一六七〇年頃に、この近辺が開発されて市街化されたことがわかります。中堂寺西寺町の形成と島原西新屋敷の形成が連動しているという想像は魅力的ですが、これ以上調べる手だてがないのが残念です。

■ 櫛笥通

『京町鑑』の記載にある櫛笥通を、町名看板①～③のある十字路から北上して、その記載の寺々が現在どのようになっているのか、確かめてみましょう。まず、櫛笥通に東面して専求寺。浄土宗西山禅林寺派。境内は、松原幼稚園の建物があり、少林寺拳法を教えるなどユニークな幼児教育をおこなっているようです。東側には勝光寺が経営している、たちばな保育園の門。門の両

専求寺

側には動物が山で遊んでいる、保育園らしい壁画。勝光寺（しょうこうじ）自体は、万寿寺通に南面していて、町名看板④のある山門が建っています。勝光寺は、日蓮宗で、洛中法華二一寺の一つといわれています。

■　末慶寺と畠山勇子の墓

■　大津事件―天子様ご心配

続いて、西側に末慶寺。山門脇には、「烈女畠山勇子の墓あり末慶寺」の石碑が建っています。大津事件（ロシア皇太子が大津で襲撃された事件、明治二四年〔一八九一〕）に関わる畠山勇子の墓があります。身元不明の遺骸を、当時の末慶寺住職（和田準然）が引き取って、手厚く葬ったと伝えられています。

たちばな保育園

千葉県生まれ、二七歳の勇子が大津事件に関して、なぜ自害したのか。ロシア皇太子への謝罪と明治天皇の立場（「天子様ご心配」）への思いという名分はわかるにせよ、なぜそのように思い詰めたのか。明治二四年〔一八九一〕当時の状況は現在では実感できませんが、時代の空気は「烈女畠山勇子」として、その名が全国に知れ渡たるように働きました。

末慶寺

「畠山勇子の墓あり」の碑

■ 小泉八雲『東の国から』

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の『東の国から』（Out of the East）の中に、「勇子—追想」（Yuko: A Reminiscence）と題する一文があります。その最後の部分を引用しましょう。自害した勇子を警官が見つけるところからです。

At sunrise the police find her, quite cold, and the two letters, and a poor little purse containing five yen and a few sen (enough, she had hoped, for her burial); and they take her and all her small belongings away.

Then by lightning the story is told at once to a hundred cities. The great newspapers of the capital receive it; and cynical journalists imagine vain things, and try to discover common motives for that sacrifice: a secret shame, a family sorrow, some disappointed love. But no; in all her simple life there had been nothing hidden, nothing weak, nothing unworthy; the bud of the lotus unfolded were less virgin. So the cynics write about her only noble things, befitting the daughter of a samurai. The Son of Heaven hears, and knows how his people love him, and augustly ceases to mourn. The Ministers hear, and whisper to one another, within the shadow of the Throne: "All else will change; but the heart of the nation will not change."

Nevertheless, for high reasons of State, the State pretends not to know.

Yuko: A Reminiscence

Out of the East: Reveries and Studies in New Japan

by Lafcadio Hearn (1895)

（訳）夜が明けて、巡査が、非常に冷たくなった勇子と二通の手紙をみつけ、さらには五円なにがし（自分の葬儀の足しになるように望んだのかもしれない）のはいった、みすぼらしい小さながま口を見つける。巡査は、勇子と所持品を現場から運びだす。

電光石火のごとく、この話はすぐさま、幾多の都市に広がる。首都の大新聞は、このニュースを受け取る。皮肉屋のジャーナリストはあらぬことを想像し、勇子の自己犠牲に対してありきたりの動機を見出(みいだ)そうとする—たとえば、他人(ひと)に言えぬ恥ずかしいこと、家族の不幸、失恋。しかし、皆、的はずれ。勇子の簡素な生活には、隠しごと、弱点、価値のないことは何もない。蓮の蕾が開いたとしても、その清らかさには及ばない。かくして、皮肉屋も勇子については、サムライの娘にふさわしい高潔なこと以外は書かない。天子は聞きおよび、民が慕い申し上げていることを知り、嘆くことを止める。為政者は

聞きおよび、玉座のかげで互いにささやき合う――「他のことはすべて変わるとしても、国の核心はかわらない」。

それにもかかわらず、国の高度な判断のために、国は知らない振りをする。

ラフカディオ・ハーン「勇子――追想」

ちなみに、原文では、「天子様ご心配」は、“Tenshi-Sama go-shinpai” と二重引用符つき、「烈女」は valiant woman と書いてあります。

小泉八雲は、明治二八年〔一八九五〕の京都奠都（てんと）記念千百年祭の折に京都へ旅行し、そのいきさつを「仏国土拾遺」（Gleanings in Buddha-Fields, 1897）の中に「京都紀行」（Notes of a Trip to Kyôto）と題して書いています。この紀行文の最後に、勇子の墓が末慶寺の墓地にあることを聞いて、人力車（kuruma）を雇って探しあてる話が載っています。よく手入れされ、手向けの花と榊（しきみ）（shikimi）、さらには清水が供えられた「烈女畠山勇子」の墓碑を見て、英雄的な無欲の精神に対して畏敬の念を抱いたこと、墓碑の裏の碑文を書き写したことを述べています。寺の中で、血糊のついた小さな剃刀、安もののがま口、血のついた帯や布、手紙や覚え書、勇子とその墓碑の写真、神主によって執りおこなわれた儀式の写真などを見、さらに、勇子の生涯、手紙の写し、顕彰した詩などを記した小冊子を手に入れています。着物が粗末であることから、旅費と葬式代に当てるため、よいものは質に入れて用立てたこと。勇子と親族の写真をみても、なんら目立ったこともない、どこにでもいそうな日本人であること。手紙の文面も、大それたことをやろうとしているのに些細なことにも気を配っていること。覚え書には、日本橋から上野まで五銭車屋に支払ったことを始めとして、汽車代、切手代など細かい出納が書いてあることなど。実務的で几帳面な一方で、遺書の詩的な内容。これらの遺品やパンフレットを見たうえで、「勇子――追想」はあまりにロマンチック過ぎたと述べる一方で、そのときに感じたことの本質的な部分（ハーンのいう詩情 poetry）を再確認しています。

Under the raw, strong light of its commonplace revelations, my little sketch, “Yoko,” written in 1894, seemed for the moment much too romantic. And yet the real poetry of the event remained unlessened, — the pure ideal that impelled a girl to take her own life merely to give proof of the love and loyalty of a nation. No small, mean, dry facts could ever belittle that large fact.

Notes of a Trip to Kyôto
Gleanings in Buddha-Fields
by Lafcadio Hearn (1897)

（訳）いままでわからなかった平凡な事柄を強烈に生の形で知った結果、わたしが一八九四年に書いた小随想「勇子――追想」は、今思うとあまりにロマンチックすぎたようである。しかし、今なお、その事件の真の詩情は矮小化されずに残っている――一人の女性を、国への愛と忠誠を証拠立てるためだけに己の命を捧げるという行動に駆り立てた、純粋な理想。些細で、みすぼらしい、無味乾燥な、どんな事実も、その大きな事実をおとしめることはできないであろう。

ラフカディオ・ハーン「京都紀行」

■ モラエス『日本夜話』

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）に傾倒していたモラエス（W. de Moraes、当時神戸ポルトガル領事）は、明治四〇年〔一九〇七〕に末慶寺を訪ねています。このときから十年余りにわたって住職（和田準然）に当てた書簡が末慶寺に残っており、一部が梶谷泰之によって紹介されています（梶谷泰之「ラフカディオ・ハーンとウエンセスラウ・デ・モラエスと烈女畠山勇子：京都に於けるハーン資料（その一）」『京都外国語大学研究論叢』、一〇、一～四（一九六八）、続編が一一、一～一三（一九七〇）、一二、一～一二（一九七一）に掲載）。のちに、九通の書簡の内容がまとめて報告されています（岡村多希子「京都、末慶寺所蔵 W. de Moraes 書簡について」『東京外国語大学論集』、四六、一六三～一七一（一九九三）、http://hdl.handle.net/10108/23567 よりダウンロード可能）。その中から、明治四〇年〔一九〇七〕一一月一八日付の書簡を次に引用しましょう（現代かな遣いよる振りがなは筆者）。

拝啓

過日ハ参堂御懇切ナル御待遇ニ預リ感謝ノ到リニ存候。小官ハ日本文ヲ認メ得ザルニ付、友人ニ託シ書面ヲ以テ右御礼申上候儀ニ御座候。只今昨日附之欧字新聞（ヂャパン・クロニクル）一葉御送附申上候間、右之五頁ニ記載之事項御一読下サレ度、末項ニハ八雲事（ヘルヌ）之書翰二枚モ記載有レ之候。右ニ付候、国元（葡萄牙）画入雑誌ニ勇子之事実、并ニ末慶寺之記事ヲ吹聴致シ度ト存候ニ付、何卒過日頂戴致候写真二枚ノ外ニ、貴僧ノ御写真一枚并ニ寺門等此件ニ関係候写真御恵与下サレ候ハバ、最トモ仕合ニ存候。右御聞済下サレ候ニ於テハ、神戸葡国領事館宛ニテ御送付下サレ候トモ、又ハ御認諾下サレ候ナレバ、小官貴寺ニ罷出ルモ宜布候間、何共御手数恐縮之到リニ候得共、不日御一報ヲ煩度、此段御依頼申上候。茲ニ謹ンデ貴僧ニ対シ敬意ヲ表シ候。敬白

十一月十八日

葡国領事
ウェンセスラウ・ド・モラエス

末慶寺御住職
和田準然殿

明治四〇年〔一九〇七〕十一月十八日付モラエス書簡
岡村多希子『東京外国語大学論集』
四六、一六三～一七一（一九九三）

「小官ハ日本文ヲ認メ得ザルニ付、友人ニ託シ」とあるように、友人に代筆してもらったものです。この書簡では、ヂャパン・クロニクルに末慶寺訪問の記事を載せ、小泉八雲の書簡を紹介したことを報じ、さらに、畠山勇子や末慶寺のことをポルトガルの絵入り雑誌の連載に執筆したいとして、追加資料の送付を依頼し

ています。モラエスの連載は、『日本夜話』（原題、Venceslau de Moraes, “Os Serões no Japão”, 1925, リスボン）としてまとめられ、その中で大津事件と畠山勇子のことを取りあげています。

平民の中で教育され生きんがために懸命に働いてゐるので、有閑なヒステリ症に罹る筈のない平民の娘が主人公なのだ。だから、勇子の精神に生じた感情の花は他のあるゆる精神に萌えでたものと同じものだと思ふ—つまり、この国の言葉で「やまとだましひ」と呼ぶあの日本精神のありふれた表はれにすぎないのだ。

「畠山勇子」
ウェンセスラウ・ド・モラエス『日本夜話』
花野富蔵訳、第一書房、一九三六

■　櫛笥通から松原通へ

末慶寺の北隣、櫛笥通に東面して、紅壁が特徴の善徳寺。通称「赤寺さん」。西山浄土宗。本尊の阿弥陀仏は室町時代の恵心僧都の作と伝えらています。沖田総司の姉のものとする墓がありますが、由来などは不明。江戸時代紅屋を営む木村平兵衛が山門を寄進その土壁を京紅で塗ったところ、赤壁の美しさが評判になり、美人になれるという御利益が広まったといいます。境内には、区民誇りの木に選ばれたシダレザクラ（指定番号A—09）が植えられています。

善徳寺（赤寺さん）

西照寺（雑炊寺）

その善徳寺の北隣、櫛笥通に東面して、西照寺。浄土宗。豊臣秀吉を雑炊でもてなしたことで、別名雑炊寺。櫛笥通は、松原通に突き当たって、行きどまり。松原通に出て東に行くと、専故院。特徴ある楼門が目印。

逆に、松原通を西へ行くと、北面して中堂寺。平安期に延暦寺横川中堂の別院として創建されたと伝えられる寺です。

『拾遺都名所図会』巻一には、次のように説明されています。

中堂寺　松原通大宮の西二町計にあり。浄土宗西山派。古は天台宗。慈覺大師の開基なりとぞ。本尊阿彌陀佛、慈覺の作。立像、三尺計。初は叡山中堂に安置しけるなり。

中堂寺

『山城名勝志』巻四の「中堂寺」の項には、

中道（堂）寺六条ノ北、大宮ノ西有二中堂寺村一、此寺中頃遷二高辻ノ南、堀川ノ東一、近年又遷二中堂寺村一

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年〔一七〇五〕

『改定史籍集覧』二二巻、近藤瓶城編、臨川書店、一九八四

新加通記類第一八

と記載されています。「六条ノ北、大宮ノ西」の六条通とは、本シリーズ第17回でふれた丹波口通にあたりますので、そのときに取りあげた慈雲寺（下松屋町通丹波口上がル藪之内町）の位置に当初の中堂寺があったことになります。

■　長円寺―洛陽三十三所第廿四番札所

中堂寺の西隣は松原通に北面して、長円寺。浄土宗本派。京都所司代板倉勝重（天文一四年〔一五四五〕～寛永元年〔一六二四〕）が慶長一三年〔一六〇八〕に、清巌和尚を開基として建立しました。洛陽三十三所観音巡礼第廿四番札所です。天明の大火（天明八年〔一七八八〕）で焼失。再建。

京都市による門前の駒札には、次のように説明されています。

長円寺（ちょうえんじ）

延命山と号し、浄土宗本派に属する。慶長一三年（一六〇八）京都所司代板倉伊賀守勝重が清巌和尚を開基に請じて建立したのが当寺の起りで、勝重の没後、その法諱（ほうき）「長円院」にちなんで寺名を「長円寺」と号した。

堂宇は天明の大火で焼亡したが、十五世瑞誉上人のとき再建され、華頂宮尊頂法親王から「長円寺」の額を賜った。いま本堂・庫裡・客殿等の建物があって、本堂には本尊として慈覚大師作と伝える阿弥陀三尊を祀る。

また本堂北の観音堂に安置する聖観音像は恵心僧都（えしんそうず）作と伝え、疫病に霊験があると信じられた。

洛陽観音巡り第二十四番の札所である。下京区大宮松原西入中堂寺西寺町

長円寺

第廿四番札所

「第廿四番札所」の碑

仏足石

『拾遺都名所図会』巻一には、中堂寺の説明のすぐうしろに、長円寺の説明が載っています。

長圓寺　同所中堂寺の西に隣る。浄土宗、百萬遍に屬す。開基は大譽清巖和尚。慶長十三年の草創なり。本尊阿彌陀佛、慈覺の作。立像、三尺計。

このあと、観音堂の本尊について、長徳四年〔九九八〕の冬に、疱瘡が大流行して子供が大勢死んだときに、本尊の聖観音を恵心僧都が彫刻して、三七日祈ったところ、流行が止まったという言い伝えがあることが説明されています。この像は長く比叡山にありましたが、天正のころ、大譽上人が感得して当寺に安置したものと伝えられています。これは、天明の大火（天明八年〔一七八八〕）以前の様子ですが、駒札の説明と異なりません。

壬生川通に西面した艮立院は、西山浄土宗。長国寺は、万寿寺通に南面。日蓮宗。宝蓮寺、万寿寺通に北面。真宗大谷派。

■ 背面倒首

宝蓮寺の向かい、長国寺の東隣に、玉樹寺（万寿寺通櫛笥西入、浄土宗）があります。門前に、「産科鼻祖賀川玄悦先生之墓所」の石碑が建っています。この石碑は、賀川玄悦の没後二百年を記念してその業績を顕彰するために、昭和五二年〔一九七七〕に建てられたもの。

この石碑の示す通り、玉樹寺には、江戸時代の産科医、賀川家三代の墓が並んでいます。墓標は、中央に「賀川子玄先生之墓」、

宝蓮寺

左に「賀川子啓先生之墓」、右に「法橋賀川子全先生墓」。傍らに、賀川玄悦（子玄）、没後二百年記念顕彰碑。向かい側に水原秋桜子の句碑。

産論の月光雲をはらひけり　秋桜子

賀川玄悦（字は子玄、元禄一三年〔一七〇〇〕～安永六年〔一七七七〕）は、江戸中期の産科医。鍼・按摩と古鉄商をしながら、医学を志しました。「死産の胎児を鉄鉤で引き出して母体を助ける」という回生術を編み出して、賀川流産科の祖となりました。鉄鉤を使うという発想は、古鉄商をしていた経験がもとになっているに相違ない。古鉄商はどちらかというと、口を糊するためのやむをえない稼業であったと考えられますが、なにが身を助けるかわからないものですね。

晩年になってから、実践と経験をもとに、『子玄子産論』（明和二年〔一七六五〕刊行）を著しました（漢文が不得手な玄悦の口述をもとに皆川淇園が筆記したものです）。この本の中で、正常胎位（背面倒首）を世界で始めて指摘したことは、日本の誇るべき医学的な発見です。それまでおこなわれていた通説は、「胎児は正立しており、出産間際に頭を下に倒立する」というもので、実証によって、この通説の誤りを指摘したものです。インターネットから、『子玄子産論』の本文のディジタル画像（影印）が入手できますので、該当部分の翻刻を次に示します。翻刻といって

玉樹寺

「賀川玄悦先生之墓所」碑

も、原文にはすでに訓点や音号符が振ってありますので、振りがなと読点（すでに句点は振られています）を追加しただけです。書き下し文も示しておきます。

大抵五月之後、腹中胎大如瓜。必背面而倒首。其頂當横骨上際而居焉。其胞衣則蓋于胎之尻上。而當母鳩尾之下。

『子玄子産論・産論翼合刻』京都大学付属図書館貴重資料画像
http://hdl.handle.net/2433/161 より翻刻

（書き下し文）大抵五月の後、腹中の胎大きさ瓜の如し。必ず背面して倒首す。其の頂は横骨の上際に当たりて居る。其の胞衣は則ち胎の尻上を蓋ふ。而して、母の鳩尾の下に当る。

『子玄子産論』の続編というべき『産論翼』（賀川玄迪、安永四年〔一七七五〕刊行、「翼」は「たすける。補佐する」の意）には、正常胎位（背面倒首）をあらわした挿絵が載せられています。版本の印影が東邦大学医学メディアセンター「額田文庫」ディジタルコレクションから入手できますので、該当の挿絵をすこしだけ加工して引用しましょう。この挿絵の中の説明文を書き下し文としたものも示します。山脇東洋の次男、山脇東門（元文元年〔一七三六〕～天明二年〔一七八二〕）が、女性死体の解剖をおこなったのが明和八年〔一七七一〕ですから、賀川玄悦や玄迪も当然立ち会ったはずで、この知見がこの挿絵に盛り込まれているものと推測されます。

賀川玄迪『産論翼』坤之巻
正産懐孕圖

凡そ正産の胎、背面倒首す。其の胞は胎の尻上を蓋ふ。其の左右の足膝は皆張りて旁出す。其の手膊則ち皆展て脇の傍に依る

賀川玄迪『産論翼』の挿絵
東邦大学医学メディアセンター「額田文庫」ディジタルコレクション
http://www.mmc.toho-u.ac.jp/mmc/nukata/33-2-2/33-2-2.html

『産論翼』を著わした賀川玄迪（字は子啓、一七三九～一七七九）は、賀川玄悦の弟子で、玄悦の娘さのと結婚し、賀川家を継ぎました。『子玄子産論』を増補した『産論翼』によって賀川流産科の理論・実践を整えたといえます。玄迪に男子がなかったため、甥の子全が養子として家業を継ぎました。代々、一貫町通（下松屋町通、今回めぐる地域の大宮通と櫛笥通の間に位置する南北の筋）松原南に住んで、塾兼産院として済世館を経営し、明治に至っています。町名看板の所在を示した略図には、下松屋通（一貫町通）松原下ル東側に旧宅の印を付けておきましたが、西側かもしれません。初代の賀川玄悦が、阿波徳島藩の藩医に取り立てられて以降、代々阿波徳島藩の産科医を勤めましたので、阿州（阿波）賀川家と呼び慣わされています。

一方、賀川玄吾（名は満卿、字は徳夫、号は有齋、一七三三

〜一七九三）は、賀川玄悦の長男。玄悦の産科術を継承しましたが、分家独立して開業しました。著書に『産術秘要』などがあります。有齋の長男賀川玄吾（号蘭齋）のときに、朝廷の医師となっています。代々、油小路丸太町南に住み、京都賀川家と呼ばれています。

代々同じところに住んだというのは、当時の人名録『平安人物志』（日文研でデータベース化されています）によって辿ることができます。『平安人物志』明和五年〔一七六八〕、安永四年〔一七七五〕、天明二年〔一七八三〕の版には、医家の項がありません。文化一〇年〔一八一三〕版『平安人物志』に至って、医家の項が立てられ、油小路丸太町南に住む賀川玄吾蘭齋（賀川有齋玄吾の子、一七七一〜一八三三）と一貫町松原南に住むに賀川玄岱が記載されています。賀川玄吾（蘭齋）は、文化一二年〔一八一五〕に典薬寮医師、翌年女医博士。次に、『平安人物志』の記載を、体裁をまねて引用しておきます。満貞は満定とも書くようです。

産
賀川満貞　号蘭齋　油小路丸太町南　賀川玄吾
賀川有恒　字子修　一貫町松原南　賀川玄岱

文政五年〔一八二二〕版『平安人物志』でも同じ。ただし、賀川玄吾が賀川摂津介となっています。「摂津介」というのは、朝廷の医師となったことによる官位と推定されます。

産　賀川満貞　号蘭齋　油小路丸太町南　賀川摂津介
仝　賀川有恒　字子修　一貫町松原南　賀川玄岱

文政一三年〔一八三〇〕版『平安人物志』には、賀川玄迪が載っていますが、襲名したものでしょう。

産　源満貞　号蘭齋　油小路丸太町南　賀川摂津介
産　賀川頼孝　字子徳　一貫町松原南　賀川玄迪

天保九年〔一八三八〕版（ただし、賀川玄道は、朱文字で追加）と嘉永五年〔一八五二〕版では次のように記載されています。

源満崇　字　油小路丸太町南　賀川若狭介
女（科）　源文煥　号　字子達　号一貫齋　一貫町松原南　賀川玄道

ここに、賀川若狭介とあるのは、賀川蘭齋（一八三三没）の長男で、賀川蘭台（名は満崇、字は子徳、一七九六〜一八六四）のこと。

賀川玄道は、賀川家第八代、『子玄子産論』と『産論翼』を合本にした校正版を、嘉永六年〔一八四三〕に上梓しています（京都大学付属図書館貴重資料画像 http://hdl.handle.net/2433/161 からディジタル画像を入手できます）。

さらに明治維新の前年の慶応三年〔一八六七〕版では、次のようになっています。

源満崇　字　油小路丸太町南　賀川筑前介
女（科）　源文煥　号　字子達　号一貫齋　一貫町松原南　賀川玄道

名が同じ満崇なので腑に落ちないところがありますが、慶応三年〔一八六七〕版の賀川筑前介は、嘉永五年〔一八五二〕版の賀川若狭介（蘭台）とは異なると推定されます。これで、両賀川家は、江戸時代を通じて同じところに住んだことが確かめられたわけです。賀川玄道は、明治二年、阿波徳島に移住しました。

■ 庶民目線

『子玄子産論』と『産論翼』でわかるように、賀川流産科は、実証的なところに特徴があります。もう一つの特徴は、賀川玄悦の生い立ちに由来する庶民目線です。玄悦の遺言を守り、京都の西はずれ庶民の町、一貫町を離れなかったことにもその姿勢がよくあらわれています。

この特徴は、弟子の佐々井玄敬が執筆した『産家やしなひ草』（安永四年〔一七七五〕刊行）からもうかがうことができます。漢字かな交じり文で、しかも、右に振りがな、左に口語による説明を加えた文章は、一般向けにお産の心得を伝えようという姿勢が顕著にあらわれています。末尾に賀川玄悦の跋（あとがき）がありますが、この書物の表記の特徴をよくあらわしているので、最初の部分を引用しましょう。次の翻刻は、京都奈良女子大学付属図書館ホームページ（http://www.lib.nara.wu.ac.jp/josei/wtitle/u.titl.html）にある『産家やしなひ草』の印影に基づいています。

産ハ病にあらず。而に今世の産家椅帯にて束縛し、湯薬にて温涼し、或は食忌に拘て養を失ひ、或ハ祷呪を信じて惑を増し、外、俗醫の制をうけ、内、穏婆の誣を用て、遂に弄して病痾をなす。

（後略）

安永乙未冬十月

阿波藩醫賀川玄悦書於

平安一貫街濟世館

（現代語訳）

お産は病気ではない。それなのに、近頃のお産をする家では、座位や腹帯で束縛し、薬湯によって温めたり冷やしたりし、あるいは、いわれのないのに食べものを忌んで、かえって健康に悪いことをし、あるいは、祈祷や呪いを信じて不安を増す。外では、金儲け主義の医者から命じられるままになり、内では、頑迷な産婆の迷信を信じて、終いには、どんどん悪い方に向かって、病気になってしまう。（後略）

「産は病にあらず」は、お産の本質を言いあてたキャッチコピーとして秀逸。「俗医」を「ものしらぬゐしや」と説明しているのもおもしろい。わざわざ「穏婆」（とりあげばば）の語を「産婆」の代わりに使っているのも、俗医に対応させるため。俗医も穏婆も、今風にいうと、いたずらに地位たかく金儲け主義の人々を差して、皮肉っているのでしょう。

昨今、医学の進歩により人工的になりすぎた、お産の現状に対する反省として、自然出産を基本においた、江戸時代の産科を見直す動きもあるようです。最近、『産論』『産論翼』の書き下し文と現代語訳（賀川玄悦・玄迪原著『平成版産論・産論翼』産科文献読書会編、二〇〇八、岩田書店）や『産家やしなひ草』の原文と現代語訳（佐々井玄敬原著『産家やしなひ草』杉山次子、二〇〇〇、産科文献読書会）が刊行されています。インターネットで入手できる現代語訳として、清水忠彦「産家やしない草考―現代

語訳および注解」（近畿大学医学雑誌、二四、一～一四（一九九九）、http://ci.nii.ac.jp/naid/110000061510 から入手可能）があります。そのほか、賀川玄悦の伝記小説として、『千の命』（植松三十里、講談社、二〇〇六）が刊行されています。

■ 大宮通松原下ル

江戸時代も明治時代も遠いこととなってしまいました。賀川玄悦の住んだ一貫町通の今は、町家が並んだ静かなところになっています。ただ、町家が少しずつ駐車場とマンションに入れ替わりつつあり、時代の趨勢として仕方のないことかと思います。

ここで、この近辺の今を紹介しましょう。大宮通にまわって、絞り工房にしむら。京鹿の子絞りの専門店。京都伝統工芸体験工房（施設番号 0132）として、絞り染めの体験ができます。南に、築百年以上の京町屋。漬け物の川勝総本家です。筆者もときどき、盆暮の贈答に利用させていただいています。

■ 旧専売公社工場跡

中堂寺西寺町の西、壬生川通と千本通に挟まれた地域は、三〇年前には、専売公社（日本たばこ産業）の工場や付帯施設があったところです。そのためもあるのでしょうが、古い民家は少ないこともあって、仁丹の町名看板はみつかりませんでした。かわりに、ライオンズクラブの看板、「壬生川通高辻下る」⑤をあげておきましょう。

五条千本（JR 丹波口駅）の東北地域

かって、専売公社工場のグランドがあったところには、壬生川団地ができました（一九七五年竣工）。この工場の操業停止は、一九八二年のこと（専売公社が日本たばこ産業株式会社に組織替えしたのは、一九八五年）。その広大な跡地の一部には、光徳公園が作られ、一九九六年より供用が開始されました。

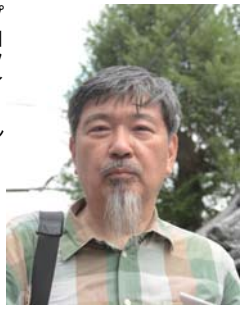
筆者が取材したときは、残りの部分に建っていた日本たばこ産

壬生川通（みぶがわどおり）　高辻（たかつじ）下（さが）る⑤

光徳公園（北西角の入り口）

業社宅と壬生花ホテルは取り壊し中でしたので、今は更地になっていることでしょう。二〇〇九年四月一四日付京都新聞によれば、この跡地（中堂寺命婦町）二三八〇〇平方メートルは、京都産業大学が購入し、二〇一二年までに付属中学高校を移転する予定らしい。中学高校の校舎とグランドを建設するほか、大学のサテライトキャンパスとしても使うとのこと。

移転が実現したあかつきには、市立の光徳小学校と松原中学校が至近距離にあり、しかも、JR 丹波口駅の西南には、京都リサーチパーク（旧大阪ガス京都製造所の跡地を再開発した施設、一九八七年発足）があるので、研究・文教地区としての発展が見込めます。隣の JR 二条駅には、ごく最近開設された立命館大学朱雀キャンパスがあるので、JR 山陰本線の沿線は、ここ二、三年で面目を一新しますね。



プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (http://xymtex.com) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第22回）2010/04/01

2010/11/13 改稿

© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 http://xymtex.com